主論文要旨

題目　A semantic approach to Ilocano Grammar

氏名　山本　恭裕

本論文は、フィリピン共和国ルソン島北西部に主に分布するオーストロネシア語族の言語であるイロカノ語を対象として共時的な記述を行うもので、論者自身による北部フィリピンでのフィールドワークにより得たデータに基づく。本論文は全 6 章からなる。第 1 章ではイロカノ語の概要、第 2 章で音韻論を扱い、第 3 章形態統語論の概観し、名詞句、項と付加詞の区別、動詞分類と動詞の形態論、節構造について論じる。第 4 章では節補語をとる述語と節補語の形態統語の記述を行い、第 5 章はイロカノ語の移動表現の特徴を記述する。第 6 章は時間指示について論じる。本論文は、付録として末尾に実験に使用したビデオクリップの記述を含む。

第 1 章では、イロカノ語とその話者に関して記述する。イロカノ語はルソン島北西部に主に分布するが、北部地域のリンガ・フランカとしてより広範囲で使用されている機能している。またイロカノ人の隣接地域への移住により、その分布は広範囲にわたる。また彼らの移住先地域に元々居住していた異なる民族によっても母語として話されるケースもあり、言語と民族の間に一対一の対応はない。イロカノ語は系統的にオーストロネシア語族マラヨ・ポリネシア語派に属し、その中でもフィリピン北部の言語と近い系統関係にある。イロカノ語には南部・北部という大きく二つの変種が認められているが、文法的な差異は比較的小さいとされる。イロカノ語は能格・絶対格型の言語であり、述語先行型の基本語順をとる。動詞に関して、フィリピンの他の言語同様、フォーカスシステム（あるいは対称的ヴォイス）と呼ばれる複雑な動詞形態論をもつほか、アスペクトについて屈折する。

第 2 章では、イロカノ語北部方言の音韻論の記述と分析を行う。本記述は、分節音韻論、音節構造と音節の重さ、強勢の付与、音韻過程を含む。より具体的には、これらに関して以下のことを論じる。まず、最小対に基づきイロカノ語には 15 の子音と 4 の母音が認められる。声門閉鎖音が音素であるか否かはそれが生起する環境に依存する。C_V という特定の環境において声門閉鎖音は音素であるが、それ以外の環境では挿入子音であるとみなすべきであることを論じる。次に、イロカノ語は二重母音を持たない。これまでの先行研究において二重母音と記述されてきたものは、子音と母音の連続であることを示す。音節構造は必ず頭

子音を持つ C(C)V(C)である。重音節と見なせるのは長母音を含む音節のみであり、閉音節と短母音を持つ開音節は軽音節である。加えて、強勢の付与はほとんど全てが予測可能であり、次末音節が重音節である場合その次末音節に強勢が落ち、そうでなければ最終音節に強勢が落ちる。加えて、グライドの挿入や同化などのイロカノ語の音韻過程を分析する。音韻過程を記述するためには、イロカノ語が少なくとも三つの異なる音韻語を持つと仮定する必要がある。また音韻過程の多くは、非適格な音節構造を修復する役割を果たしていることを示す。理論的貢献として、イロカノ語の音韻変化のデータは母音と子音に対して統一的なアプローチをとる素性理論を支持する。また、強勢付与により定義される音韻語は、他の現象により定義される音韻語のドメインよりも統計的に優位な水準で広いという先行研究の報告に合致することを報告する。

第 3 章はイロカノ語の形態統語論を扱う。動詞は意味・形態・統語的基準から動的動詞と静的動詞に分類できる。動的動詞はフォーカスシステムという派生形態論を持ち、行為者焦点 (Actor focus)、対象焦点 (Patient focus)、場所焦点 (Locative focus)、移動物焦点 (Conveyance focus) という 4 つのカテゴリーが区別される。また、動的動詞はアスペクトについて屈折を見せ、形式的に三つの屈折形式が区別される。動的動詞によって表現されるアスペクトには perfective/imperfective が含まれる。動作動詞は明示的な標識がなくとも perfective を表現できるという特徴を持つ。加えて、動的動詞は ‘potentive’ と呼ばれる形態クラスへの屈折も見せる。これらの形式は動作の非意図性や無意志性を表現するほか、動作が遂行されたことを表現するのに使用される。静的動詞はこうした屈折を持たず、明示的な標識がない場合、imperfective として解釈される。静的動詞がカバーする意味範囲として、関係性、規模、物理特徴、価値の良し悪し、速さ、色、難易度、人間性などが挙げられる。次に名詞句の構造の記述を行う。人称代名詞は閉じたクラスであり、述語位置で現れる形式と項や付加詞として機能する形式が異なる。後者は能格・絶対格および斜格の区別を表し、また minimal-augmented の数の値を区別する。また人称代名詞は述語と直接結びつくことができる。名詞は固有名詞と一般名詞の二つに分けられる。これらの名詞が項や付加詞として機能するためには、指示性 (referential) を表現する冠詞と結びつく必要がある。名詞、指示詞、形容詞、属格句、数詞、関係節が意味的主要部である名詞を修飾する要素として現れうる。指示詞は格および数を形式的に区別する。数詞は十進法に基づき、形態的・意味的に単独の閉じたクラスを形成する。関係化可能な名詞（句）は自動詞構文の主語と他動詞構文の被行為者である。特筆すべき点として、イロカノ語の名詞句は意味的主要部を持たない修飾要素のみの構造を許す。このような主要部なし名詞句に対して省略分析は適用できないことを論じ、イロカノ語の名詞句は主要部のない外心構造を許すと結論づ

ける。イロカノ語においては動詞の結合価と他動性を区別する必要がある。他動性は統語的な項の数によって定義され、0 項 (atransitive)、1 項 (intransitive)、2 項 (transitive) という可能性がありうる。従ってイロカノ語では 3 項を含む構文 (ditransitive construction) は存在しない。一方、結合価は純粋に意味に基づく概念である。ある動詞の語彙的表示においていくつの変数が含まれるかという基準から特徴付けられる。イロカノ語では結合価と項の間において数にミスマッチが見られるケースが多数存在する。例えば、3 つの結合価を持つ動詞が同数の項をとることはないので、こうした場合常に 2 つの値は異なる。加えて、節の先頭を占める述語の前の位置にもスロットを想定できる。このスロットに出現するのは主に項や副詞的要素であり、場所や時間のセッティングやトピックの表示機能を持つと考えられる。

第 4 章は、イロカノ語の節補語に関する記述を提供する。この言語の節補語は主節とほぼ同様に構成される。節補語は冠詞 *ti* かリガチャーによって導入される。イロカノ語の節補語をとる述語には、引用、発話、知覚、命題への態度、様相など、意味的に様々な種類が存在する。本章の主張として、こうした述語の意味が、それらが項として取る節補語の構造の関数となるという点である。つまり、時間的近接性や使役性が高い述語タイプであるほど、それらの節補語が持ちうる形態統語的性質が強く制限される。特に動詞の屈折や項の義務的な共有といった特徴において、こうした意味と形式の対応関係が反映される。例えば、発話の述語タイプ（e.g. *say, explain*）では、主節が表現する発話事象と、節補語が表現する事象の間の時間的近接性および影響性が低い。このような場合、節補語の動詞の屈折可能性は一切制限されず、また項の共有も義務的ではない。一方で、Phasal の述語タイプ (e.g. *start, stop, finish*) では、節補語が表現する命題の真理値は主節命題の真理値に含意されるため影響性が強く、二事象の時間的近接性も高い。こうした場合節補語の動詞屈折は限定的となり、項の共有が必須である。また共有される行為者項は主節において一度しか表現できない。

第 5 章では、イロカノ語の移動表現について記述を行う。Talmy (1985; 1991) では、経路を主動詞で表現するかそれ以外で表現するかという基準に基づき二つの類型が提案されている。この類型論の近年の展開および課題について導入を行い、イロカノ語に関して次の点を議論する：(a) イロカノ語の移動動詞はどのような意味を持つものが豊富であるか、(b) 移動を構成する意味要素（経路、様態、場所など）はそれぞれ文のどの位置で表現されるか、(c) 移動事象は単節で表現されるか、あるいは複数の節で表現されるか、そしてその傾向は移動事象の種類によって異なるのか、(d) 単節で表現可能な移動事象の複雑さに制約はあるか、(e) GO や COME に対応する動詞の意味はどのようなものか、を検証する。まず、イロカノ語の移動事象の研究のために行った、映像刺激を用いた描写実験

について概略を述べる。移動動詞としてイロカノ語は豊富な経路動詞、様態動詞を持つ。移動事象を表現する手段として動詞連続構文が存在する。動詞連続構文は複数の独立した動詞を含む単節の構文である。これらの構文では少なくとも必ず一つの項が全ての動詞によって共有される。一方で、いくつかの形態統語的特徴に基づき、動詞連続構文には 3 つのサブタイプが存在することを報告する。また、移動の場所 (ground) の表現には主に指示副詞や名詞句が使用される。実験の結果、イロカノ語において移動事象の描写は主に単節で行われることが明らかになった。自律的な移動の描写には主に動詞連続構文が使用され、そのため経路は様態などの要素と同様に動詞で表現される。また使役移動でも単節による描写が多数であり、経路は動詞で表現される。イロカノ語では経路が動詞以外で表現されることがほとんどなく、場所要素を表現する名詞句や指示副詞は起点、着点、通過点といった経路の区別に関わらず同じ形式が用いられる。さらに、経路動詞を用いずに様態動詞によって経路を表現する構文の存在を報告する。イロカノ語の COME に相当する動詞は話者空間への移動を表現するが、GO に相当する動詞は直示的な指定を持たない総合的な移動を表す動詞であり、直示的な意味は推論によって生じる含意である。

第 6 章では、イロカノ語の時間指示に関して記述する。イロカノ語では動詞の屈折によってアスペクト (viewpoint aspect) が区別される。この言語は時制を持たず、そのため未来や過去といった時間概念の区別を文法範疇によって表現しない。動詞によって表現されるアスペクトは perfective/imperfective であり、時間表現には副詞的表現も多く使用され、今日、明日といった直示的な表現、曜日、月などのカレンドリカルな表現、頻度を表す表現など意味的にいくつかのタイプに分類できる。第 6 章ではさらに、時制範疇を持たないイロカノ語の話者がどのように時間情報を伝達しているかという問いを扱う。